筑波大学　先史学・考古学研究　第23号　105-113　2012

調査報告

茨城県つくば市金田古墳の測量調査

荒　　友里子

Ⅰ．はじめに

『常陸国風土記』によれば，古代常陸国の地域にはその成立以前にいわゆる「国造のクニ[1)]」が6つ存在していたとされ，そのひとつに「筑波のクニ」がある（増田ほか1981; 桜村史編纂委員会1982; 滝沢1994）。文献史料だけではその性格や広がりがよく分からない中，国家形成期におけるこの地域の様相を探るためには，古墳の存在形態を把握することがひとつの手がかりとなると言える。筑波大学ではこれまでにこうした問題意識を背景として，「筑波のクニ」との関わりが強いと考えられる桜川流域の古墳の発掘・測量調査を精力的に行い，茨城県南部古代地域史の研究を進めてきた（増田ほか1982; 西野ほか1991; 日高1998）。

今回報告する金田古墳もこの桜川流域に位置する古墳のひとつであり，これまで『桜村史』の記述などに基づいて「全長75mの前方後円墳」とみなされてきた（桜村史編纂委員会1982; 石橋2010）。どのような経緯からそうした評価が下されたのかは定かではないが，その後は下草などの繁茂が激しく，現地に赴いて実際に確認することは望めないような状況が続いていた。しかし，最近になって地元住民の方々を中心とするNPO組織の活動により，古墳の位置する台地一帯が間伐や下草刈りによって整備され，金田古墳の姿を確認することも可能になった。かねてより桜川流域で活動を展開してきた私たちの研究室では，これを絶好の機会として捉え，金田古墳の正確な墳丘規模・形状の把握を目的とした測量調査を実施することとした。

測量調査は2011年1月11日から16日にかけて筑波大学人文学類先史学・考古学コースの先史学実習（担当教員：三宅　裕）として実施され，以下の大学院生，学類生が参加した。大学院生：荒友里子，飯塚守人，三宅　慶，学類生：大田瑞穂，佐々田光毅，庄子亮平，鈴木志野，宮内優子，森川愛美，山本健太郎，雪丸千彩子，牧　武尊，牧野真理子，渡辺　雄。また，日本学術振興会特別研究員である長谷川敦章氏からご指導，ご協力を賜った。

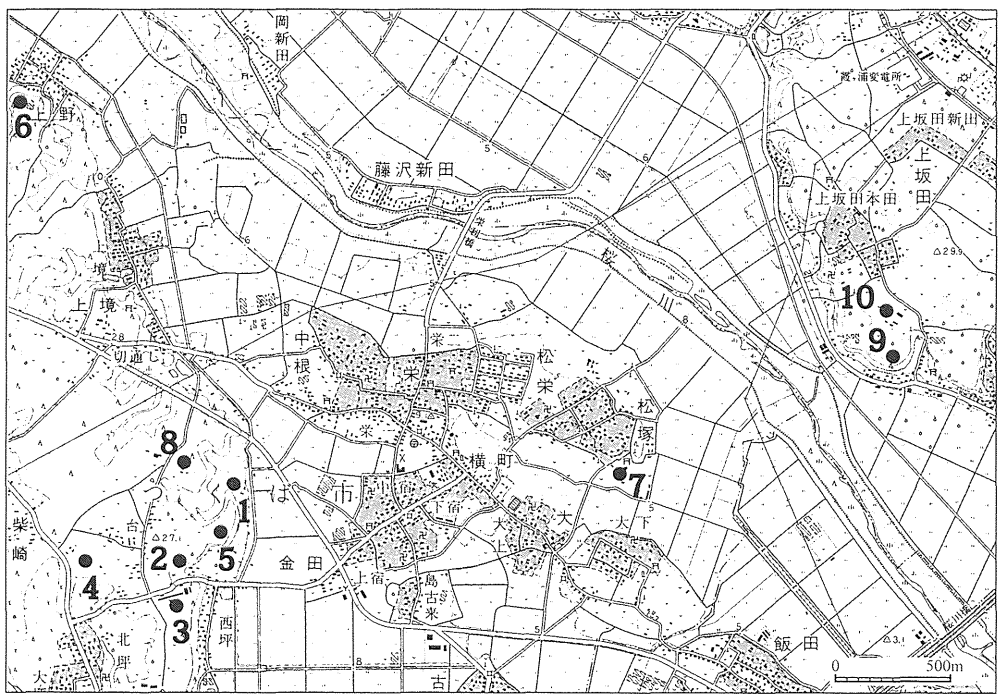
Ⅱ．古墳の位置と周辺の遺跡

桜川は筑波山西麓方面から霞ヶ浦に注ぐ河川であり，当古墳はその下流右岸に形成された標高約25mの台地縁辺部に立地する。この台地上に分布する金田西遺跡，金田西坪A遺跡，九重東岡廃寺（河内廃寺）は，古代常陸国11郡のひとつ河内郡の郡衙にそれぞれ関連する遺跡であると目されており，順に官衙地区，正倉，仏教関連施設に相当すると考えられている。ま

た金田古墳のすぐ南には小田氏幕下，沼尻氏の居城とされる金田城跡が位置する（第1図）。このように，金田古墳が位置する台地には古代から中世にかけて連綿と地方政治の中枢・要所が置かれており，この地が地勢学的にも大変重要な意味をもっていたことをうかがい知ることができる。

桜川下流右岸の台地から微高地には，常陸国西部地域の首長系譜を検討した滝沢誠氏が「桜東部グループ」と呼んだ古墳が点在しており，金田古墳もこのグループに含まれる（滝沢1994）。金田古墳以外には，4世紀末葉を中心とした築造年代が想定されている上野天神塚（前方後円墳），築造年代不明の大型円墳である横町2号墳，松塚1・2号墳（前方後円墳）などが知られており，このうち横町2号墳と松塚1号墳ではすでに測量調査が行われている（北内1981; 日高1998）。松塚1号墳の歴史的背景を考察した日高慎氏は，その構成要素や共伴遺物から，築造年代を6世紀末と推定した。その上で，より上流の桜川中流域に位置する6世紀前半の八幡塚古墳とは築造規格が異なるのに対し，出島半島の風返稲荷山古墳とは規格が一致する点に注目し，桜東部グループはこの時期に桜川中流域のグループとの関係を断絶させる一方で，出島半島との結びつきを強めていったと想定している（日高1998）。

一方，桜川を挟んだ対岸の新治台地（土浦市）には，4世紀から5世紀前半における首長の存在を伺わせるような前方後方墳・前方後円墳は今のところ知られていない。しかし，県内唯



第1図　金田古墳の位置と周辺遺跡
（国土地理院発行2万5千分の1地形図を用いて作成）
1. 金田古墳　2. 金田西遺跡　3. 金田西坪A遺跡　4. 九重東岡廃寺　5. 金田城跡
6. 上野天神塚古墳　7. 松塚古墳群　8. 横町2号墳　9. 武具八幡古墳　10. 武者塚古墳

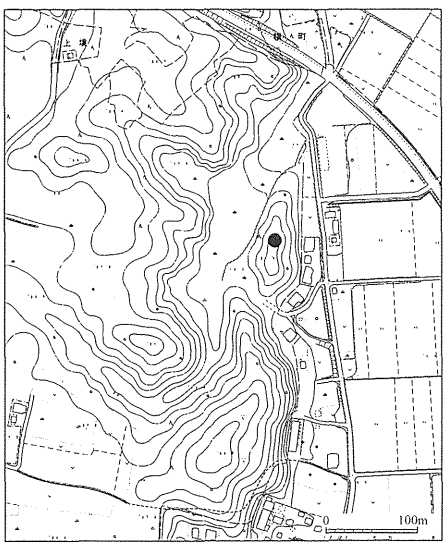
一の眉庇付冑を含む武具類の出土が伝えられる，5 世紀後葉の武具八幡古墳（坂田塙台 2 号墳，径 15m の円墳）が築造されたのを皮切りとして，小円墳ながらも目を引く副葬品を有する小型墳が現れるようになる。時代は下るが，金銅装三累環頭太刀，銀装圭頭太刀，鉄柄付銅灼などを出土した 7 世紀末の武者塚古墳は，この小地域と中央政権との結びつきを想定させる代表例といえよう（増田ほか 1986）。

このように，5 世紀後葉ないしは 6 世紀初頭という時期に，それまで古墳が築造されなかった地域において，規模の割にすぐれた副葬品を出土する古墳が出現するという現象は，列島内の各地にも認められる。武者塚古墳発掘者の一人である岩崎卓也氏は，「これを中央政権との結びつきの結果と捉えるならば，従来の首長とは別の政治的小首長が生まれた可能性が考えられる」とし，この時期をひとつの画期として捉えている（岩崎 1989）。

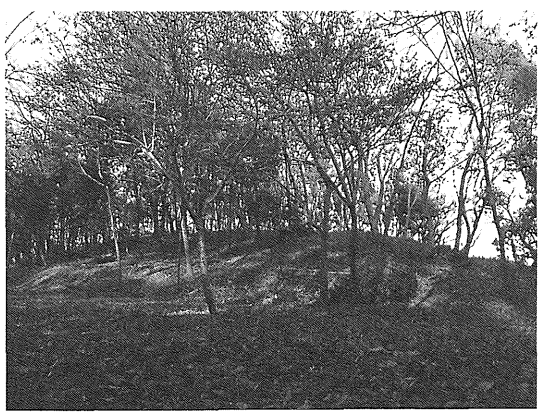
Ⅲ．墳丘が立地する台地の特徴と測量結果

金田古墳は桜川の右岸に広がる標高 20m ほどの台地の縁辺部に立地する。古墳からは桜川両岸の沖積低地を見渡すことができ，遠くには霞ヶ浦の土浦入りも望むことができる。金田古墳の西方には小さな谷が台地を開析しているため，古墳の立地する台地は最大幅約 50m，長さ約 120m の島状になっている（第 2 図）。上述したようにすぐ南方には金田城跡があり，本来南方の台地に連なる細長い舌状台地が，築城の際に切断され島状になってしまった可能性も考えられる。実際，南方の台地の先端部には，人為的な削平によるものとみられる直線的な崖のラインを確認することができる。

基準点の設置は，光波トランシットを使用した開放トラバース方式で行い，測量は平板とレベルを用いて進めた。縮尺は 100 分の 1，等高線間隔は 25cm とした。前述したように，本古墳はながらく前方後円墳であると考えられてきたが，実際に現地で観察を行ったところでは円墳である可能性が高いように思われた。そこで，両方



第 2 図　周辺地形と金田古墳の位置



第 3 図　金田古墳遠景

の可能性を考慮しつつ，詳細な測量図から判断できるよう，可能な限り広い範囲を測量することにした。

第2図の地形図には現れていないが，この古墳のすぐ北側は大きく抉れており，その更に北に自然地形と考えられる舌状台地の先端部が残存している。この北側台地との対比から，古墳の周囲では標高22.5m前後が自然地形での台地頂部と思われる。円丘部は頂上（標高25m付近）に，かつてこの古墳に対して何らかの改変行為が行われたことを思わせる小さな窪みがある。南側は傾斜が緩く，盛土が流出しているものと思われる。段築や周溝の有無は確認し難い。一方で前方部と考えられてきた南側の様子をみると，台地の形状に沿った細かな段が標高21.5m付近にあるものの，円丘の裾部と認識できる標高23m前後とは整合せず，また古墳の形状としても不整形となる。したがって，この南側の部分は，台地頂部の一部と考えて矛盾はないと考えられる。もし仮に前方部が後代に削平されていたとしても，そうした痕跡は円丘南側にみられない。

以上のような根拠から，やはり現況で墳丘として認識できるのは円丘部のみである（第4図)。したがって本稿では，当古墳を円墳として扱うこととする。標高23mの等高線周辺を墳裾として墳形規模を求めると，直径はおよそ20m，高さは2m強となる。

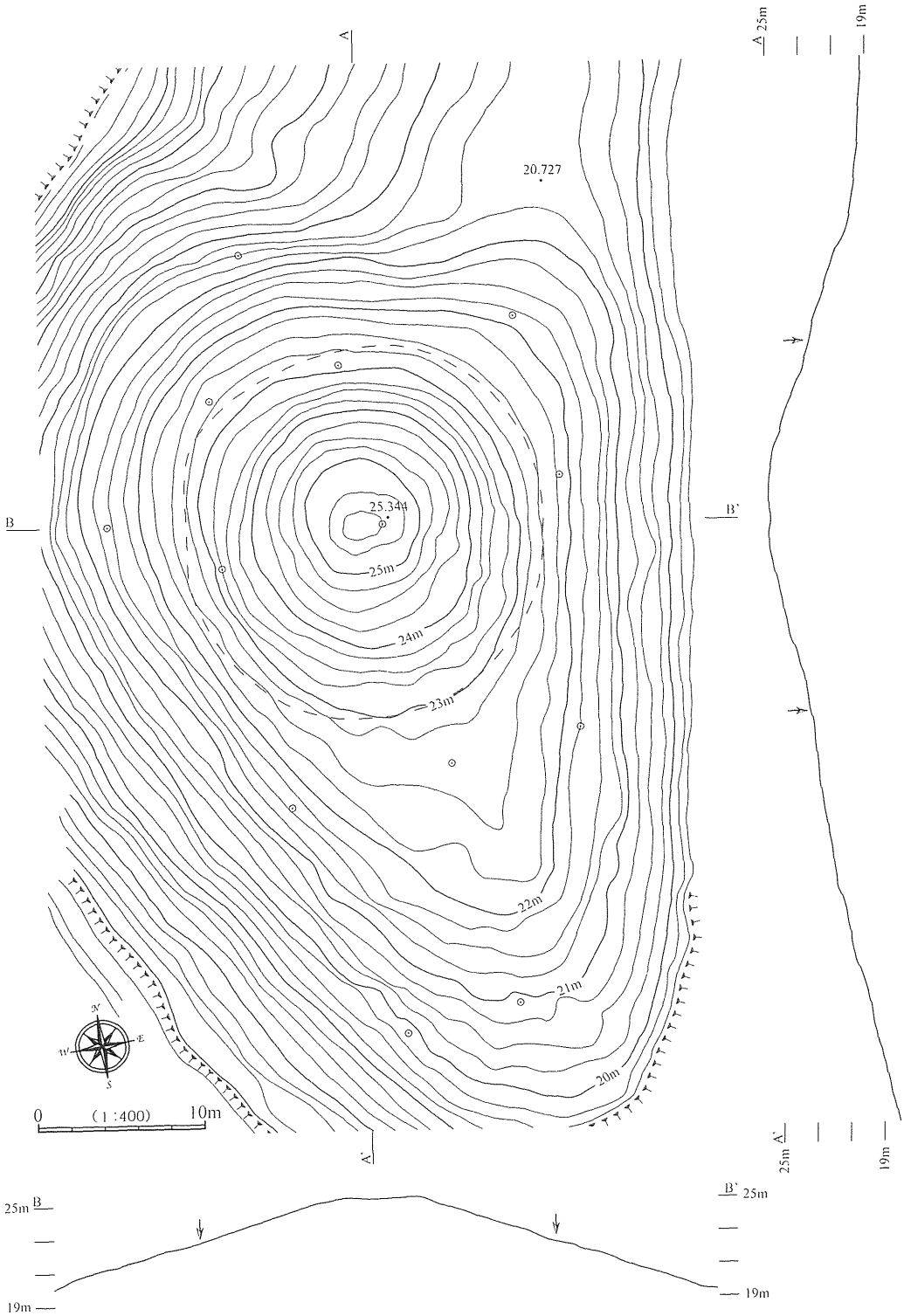
Ⅳ．伝出土遺物

金田古墳からは長さ90cmの鉄刀1口，石製模造品4点が出土したと伝えられており，現在はつくば市桜歴史民俗資料館に保管・展示されている。発掘調査によるものではないため，確実に本古墳に伴うものなのか問題もあるが，金田古墳の年代・性格を検討する上で数少ない手掛かりとなることから，今回測量調査と併せてその観察と実測を行った。

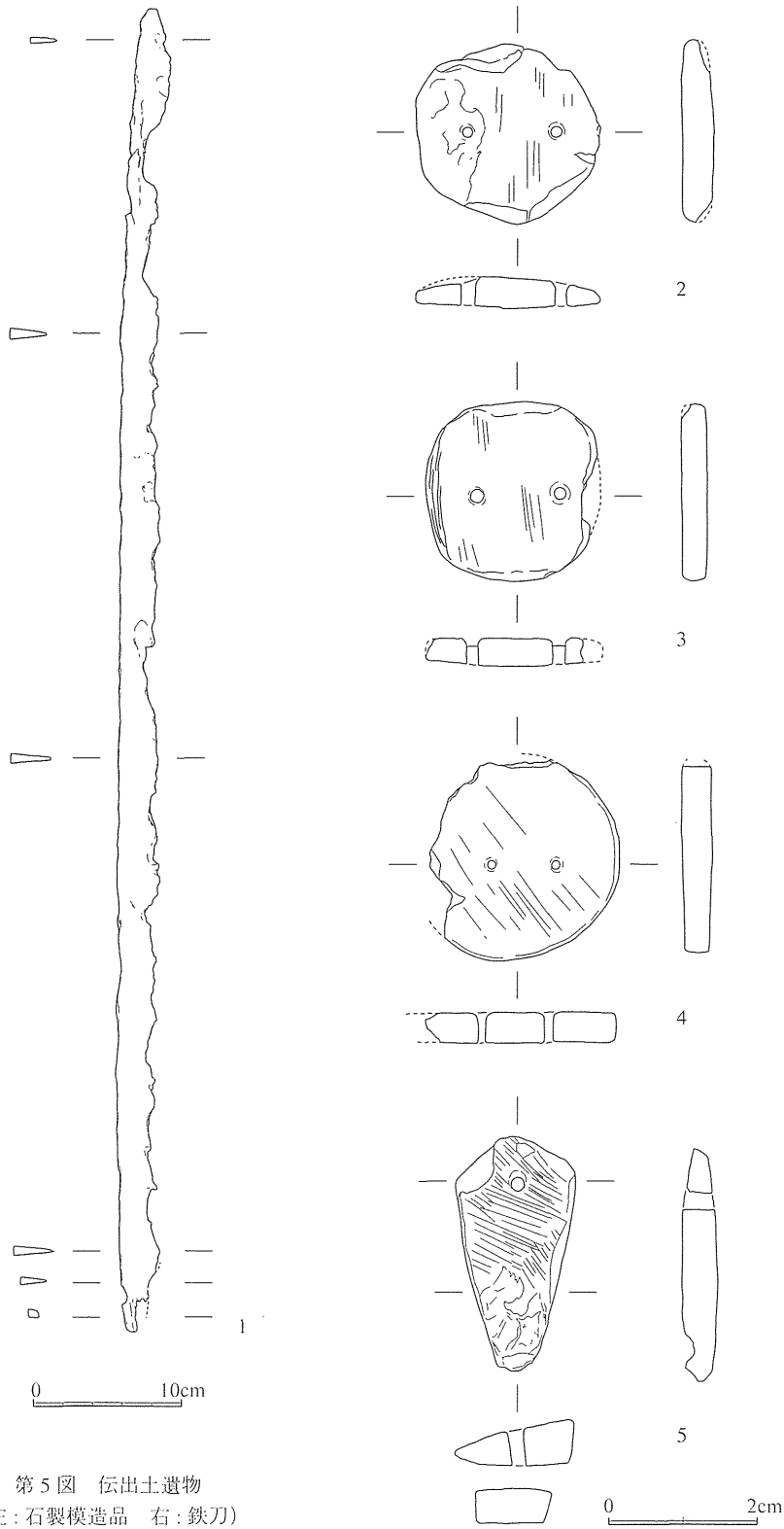
1．鉄刀

全長89.5cm（刃部85cm)，身幅残存部2.7cm，厚さは背部が7mmで中央部が4mm，関部幅は1.8cmである（第5図：1)。遺存状態はあまり良くなく，刃部が全体的に欠けている。かろうじて関が確認でき，撫角片関とみることができるが，「平造り鉄刀においてもっとも変化に富む部分」（臼杵1984a: 50）とされる茎が完全に欠損しているため，これ以上の分類は不可能である。

しかし，関の切りこみの深さから大まかな年代は想定することができる。鉄刀の関は時代が下るにつれて無関から有関へ，また切りこみは深くなる傾向にある。具体的には5世紀後半に切りこみの深いものが現れ始め，6世紀に入ると茎の造りの先細りが顕著になるのと相まって深い切りこみのものが多くなるようである（臼杵1984b: 99)。刀身長と身幅は4世紀代では長さ60-80cmで細身（3cm前後）のものが多いのに対し，6世紀代になると80-100cmで幅広（4cm前後）のものが多くなり，次第に長大化することも指摘されている。なお，6世紀後半には両関化が進む。本鉄刀は比較的深い切りこみの撫角関を持つと言え，尚かつ刀身長は約85cm,


A
A'
B
B'
20.727
25.344
25m
24m
23m
22m
21m
20m
N
E
W
S
0
(1:400)
10m
25m
19m

第４図　金田古墳測量図



第５図　伝出土遺物
（左：石製模造品　右：鉄刀）

身幅は3.5cmほどであったと考えられることから，5世紀後半から6世紀前半に年代付けられる可能性が高いと言える。

2．石製模造品

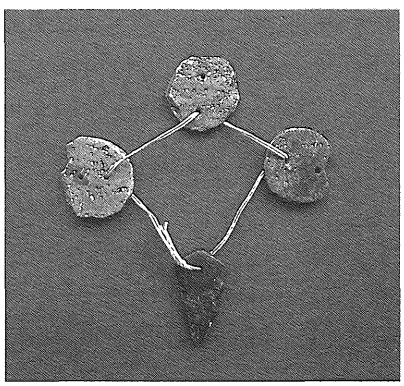
金田古墳から出土したと伝えられる石製模造品は，いずれも滑石質の石で作られた双孔円板3点（第5図：2-4，第1表）と剣形模造品1点（第5図：5，第2表）である。

第1表　双孔円板

番号	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	色調	特　　徴
第5図：2	25	4	2	明褐色	両面平滑，片面穿孔，縦位の研磨（研磨痕少なめ）
第5図：3	25	4	2	緑褐色	両面平滑，片面穿孔，縦位の研磨（研磨痕少なめ）
第5図：4	28	3-4	1	茶褐色	両面平滑，片面穿孔，研磨：左上斜（開孔面）／横（反対面）

第2表　剣形模造品

番号	長さ (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	色調	特　　徴
第5図：5	32	16	4-6	2	黒褐色	両面平滑，片面穿孔，研磨：左上斜（開孔面）／横（反対面） 開孔部面の左側面が上部のみ薄いため著しく歪んで見える



第6図　滑石製模造品

石製模造品は古墳時代前期後半から後期までの長きにわたり副葬品及び祭祀具として使用されてきたが，その種類やセット関係，精粗の度合いは時期毎の違いが著しい。全体的には時期が下るにつれ粗製化，形骸化する傾向にある。双孔円板と剣形模造品は中期中頃-後半に新たに組成に加わり，後期には石製模造品の主流となるが，その時期には石製模造品自体古墳からの出土が減少してしまう（木下1991）。

茨城県内に目を向けると，石製模造品の出土数は関東でも上位に位置づけられるという[2)]（樫村1993）。東日本埋蔵文化財研究会による石製模造品の集成を見ると，その種類に関わらず，全体的に特定の地域に分布が偏っていることがわかる。具体的には古代郡制の名称で那珂と信太にあたる地域で，特に有孔円板と剣形模造品の集中度が顕著である。例えば両地域の集落遺跡で出土した有孔円板と剣形模造品は，那珂が446点と49点，信太が147点と72点であるのに対し，河内では6点と2点である（東日本埋蔵文化財研究会1993: 5）。また，剣形模造品は全体的な出土数自体が少ないことも指摘されている（石川・綿引2007）。

鉄刀，滑石製有孔円板，剣形模造品が共に出土した円墳は，これまでつくば市域内の古墳においては確認されていないが，稲敷郡阿見町の実穀古墳4号墳からはセットで出土している。

したがって副葬品の組み合わせとしては大きな問題はないと考えられる。また，実穀古墳4号墳は主体部の形態や土師器から5世紀末 - 6世紀初頭と年代付けられており，金田古墳の鉄刀と石製模造品の年代観とも矛盾しない。

V．金田古墳の位置づけ

本稿で検討した鉄刀・滑石製模造品が金田古墳に帰属するものであるならば，これまでみてきたように本古墳は5世紀後葉から6世紀初頭に年代づけられると言える。この年代観自体は，これまで指摘されてきたものと大きな違いはないが，今回の測量調査によって金田古墳が前方後円墳ではなく，円墳であることが明らかになったことの意義は大きいと思われる。これまで桜東部グループとして天神塚古墳，金田古墳，松塚1号墳という首長系譜の存在が想定されてきたが（滝沢 1994），松塚1号墳の年代が6世紀末と考えられるようになり（日高 1998），今回の測量調査で金田古墳が5世紀末の円墳である可能性が高くなったことで，従来のような捉え方は一度検討し直してみる必要が出てきたように思われる。少なくともそこに連続する首長系譜の存在を見出すことは困難であり，そうなると桜東部グループという設定自体も再考してみる必要があるかもしれない。

すでに述べたように，金田古墳にほど近い前方後円墳の松塚1号墳には，6世紀末という年代が与えられている。日高氏は復元検討の結果，松塚1号墳の規格は出島半島の風返稲荷山古墳に対し4：5の比率の相似墳であることを指摘し，これは6世紀末頃に桜東部グループが出島半島地域との繋がりを強めた結果ではないかと想定している（日高 1998）。このような文脈に金田古墳を組み込むと，日高氏の言う「出島半島との繋がり」が強まる以前の円墳ということになる。加えて，古墳の築造が希薄であった5世紀前 - 中頃よりも後に築造されたということにもなる。

ここで，円墳であることが明らかになった金田古墳の性格を考えてみると，岩崎氏がその存在を指摘した「従来の首長とは別の政治的小首長」が桜東部地域においても出現したことを示すと理解することもできるかもしれない。そのような古墳の典型は，対岸の台地上に位置する武具八幡塚古墳である。金田古墳と武具八幡塚古墳の築造された政治的背景が同様のものであったとは限らないが，低地を見下ろす台地上という立地にみられる共通性や河内地域では稀な種類の石製模造品を伴うことなどから，このような可能性も指摘しておきたい。また，6世紀に入るとこの地域では群集墳の築造が活発化するとみられている。金田古墳はそうした群集墳が造られるようになる契機の古墳という側面も持つのではないだろうか。

謝辞

本稿を書くにあたり，つくば市教育委員会の石橋　充氏には資料貸出の労を取っていただき，かつ資料や当地域の古墳時代像に関して様々なご教示を賜った。また，測量調査を快く許可していただいた金田集落の方々，調査期間中に様々な便宜を図っていただいた稲葉浩吉氏に改めて感謝申し上げます。

註

1）律令制下の「国」と区別する意味で「クニ」と表記した滝沢氏の意向に従う。

2）ただし，集落遺跡から出土したものが大多数を占める。石製模造品が出土するのは，古墳よりもむしろ集落や祭祀遺跡からであることが多い。

参考文献

浅野和久ほか　1999 「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書―実穀古墳群・実穀寺子遺跡 1―」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 144 集　財団法人茨城県教育財団.

石橋　充　2010 「つくば市域の古墳群」佐々木憲一・田中裕編『常陸の古墳群』六一書房　233-267 頁.

石川義信・綿引英樹　2007 「県南地域における古墳時代の滑石製模造品について」『菟玖波―川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集―』川井・齋藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会　117-130 頁.

岩崎卓也　1989 「古墳分布の拡大」白石太一郎編『古代を考える　古墳』吉川弘文館　36-72 頁.

岩崎卓也・松尾昌彦　1985 「夜刀の神と開発」『えとのす』第 28 号　98-106 頁.

臼杵　勲　1984a 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　49-70 頁.

臼杵　勲　1984b 「鑷本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』第 31 巻 2 号　97-106 頁.

小野塚拓造　2010 「茨城県土浦市所在坂田塙台 11 号墳の測量調査」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 21 号　101-108 頁.

樫村宜行　1993 「茨城県の概要」『第 2 回　東日本埋蔵文化財研究会　古墳時代の祭祀―祭祀関係の遺跡と遺物―　第Ⅱ分冊－東日本編Ⅱ－関東地方』東日本埋蔵文化財研究会　1-138 頁.

北内三喜男　1981 「8. 横町 2 号墳」『筑波古代地域史の研究』筑波大学　84-86 頁.

木下　亘　1991 「石製模造品」『古墳時代の研究　8　古墳Ⅱ　副葬品』雄山閣出版　161-171 頁.

桜村史編纂委員会　1982 『桜村史』上巻　桜村教育委員会.

椙山林継　1998 「玉と魂―石製品の祭り―」『日本の信仰遺跡』雄山閣　157-174 頁.

滝沢　誠　1994 「筑波周辺の古墳時代首長系譜」『歴史人類』22　91-112 頁.

西野　元ほか　1991 『古墳測量調査報告書Ⅰ―茨城南部古代地域史研究―』筑波大学歴史・人類学系.

日高　慎　1998 「茨城県つくば市松塚 1 号墳の測量調査」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 9 号　97-109 頁.

樋口清之・山田　実　1967 「塚山古墳調査報告」『上代文化』第 37 号　71-79 頁.

増田精一ほか　1981 『筑波古代地域史の研究』筑波大学.

増田精一ほか　1986 『武者塚古墳』新治村教育委員会.